

9～10 世紀におけるオホーツク文化および擦文文化の焼失住居址から出土した木質遺物の樹種同定

森林資源科学講座 樹木生物学分野
松波秀法

(背景と目的) オホーツク文化は、およそ 5～9 世紀頃にオホーツク海に面したサハリン南部から北海道北～東部そして千島列島に展開した先史文化である。一方、擦文文化は本州の奈良、平安時代に相当する約 8～12 世紀頃に本州の土師器文化の影響を受けて北海道全域にかけて成立した文化である。本研究では、オホーツク文化と擦文文化における木材利用（特に住居建築材）を詳しく分析することを目的とした。オホーツク文化については北見市トコロチャシ跡遺跡の竪穴住居址 3 基、擦文文化については北海道大学構内 K39 遺跡北キャンパス総合研究棟 6 号館地点の竪穴住居址 1 基から出土した木質遺物の樹種同定を行った。この結果を比較し、オホーツク文化と擦文文化における木材利用の特徴や違いを検した。

(方法) トコロチャシ跡遺跡の焼失住居址 3 基から出土した木質遺物の中から 166 点（炭化材 155 点、未炭化樹皮片 11 点）、K39 遺跡北キャンパス総合研究棟 6 号館地点から出土した木質遺物の中から炭化材 180 点を分析した。炭化材については、走査電子顕微鏡観察を行った。一方、未炭化の樹皮片については、目視により形態的な特徴を観察し、同定した。

(結果及び考察) トコロチャシ跡遺跡においては、3 基の焼失住居址を合わせ、炭化材については 16 種（群）、樹皮片についてはカバノキ属のみが同定された。トドマツが全炭化材試料の半数以上に達した。このことは、本遺跡の竪穴住居の建築材にトドマツが選択的に利用されていたことを示す。これまでに炭化材の樹種同定が行われたオホーツク文化の焼失住居例と比較すると、建築材の多くがモミ属である点で本結果と一致する。

本遺跡では、建築材の部材別の樹種選択に関しても情報を得ることができた。竪穴住居壁際の土留めに用いられた壁材から採取した試料の 82% がトドマツであった。一方、柱材試料の 44% はイチイであった。この結果から、壁材にはトドマツが、柱材にはイチイが選択的に利用されていたことが新たに示唆された。

K39 遺跡北キャンパス総合研究棟 6 号館地点の炭化材の分析では、5 種（群）が同定された。同定された樹種は全て広葉樹であり、その中でもトネリコ属が大半を占めた。このことは、本遺跡の竪穴住居の建築材にトネリコ属の樹木が選択的に利用されていたことを示す。これまでも石狩低地帯日本海側の擦文文化期の遺跡からトネリコ属の材が多く出土している一方で、石狩低地帯太平洋側の擦文文化期の遺跡からコナラ属の材が多く出土していることが報告されている。以上のことから、擦文文化期において、札幌市を含む石狩低地帯日本海側では竪穴住居の建築材をはじめ様々な用途に、ヤチダモなどトネリコ属の樹木を多用する生活が営まれていたことが示唆される。